

地域伝承が子どもおよび高齢者の社会的認知能力に及ぼす効果：神楽の多面的検討から

【代表者】 佐藤 鮎美 島根大学 人間科学部 講師

【共同研究者】 菊野 雄一郎 島根県立大学 短期大学部 講師

佐藤 桃子 島根大学 人間科学部 講師

岩瀬 峰代 島根大学 大学教育センター 准教授

高見 友理 島根大学 人間科学部 准教授

【研究の目的と内容】

本研究の目的は、地域の伝承（特に神楽）が、地域の子どもの高齢者の社会的認知能力（コミュニケーション能力の基盤にある認知機能）に与える効果を多面的（心理学・福祉社会学・人類進化的）に検討することである。地域伝承活動は子どもの発達にポジティブな効果をもたらすことが期待されているが、これまでの研究は観察やインタビューによる主観的評価のみを用いたものであり客観的指標を用いた数量的評価は未だなされていない。また、高齢者は地域における役割や他世代との交流により、健康を維持できることが報告されているが、地域伝承活動においても同様の効果が得られるかどうかも未だ検討されていない。そこで、本研究では、地域の伝承（特に島根における神楽伝承）が子どもおよび高齢者に与える効果を、特に社会認知能力に焦点をあてて、インタビューなどの主観的評価で包括的に捉えるとともに、客観的指標により検証することを目的とする。さらに、これらの効果を心の構造（心理学）、社会の構造（福祉学）、両者の相互作用（人類進化学）といった視点からも検討し、考察することを目指している。

特に本年度は、プロジェクトの1年目にあたり、島根の神楽が地域にもたらしている影響を包括的に捉え、今後の研究の方向性を決定することがプロジェクトの目標であった。その目標達成のため、具体的には、①島根の神楽に精通した外部研究者からの基礎情報共有のための講義および研究助言、②島根の神楽社中および地域住民を対象とした参与観察およびインタビューを計画した。

上記①の活動により、研究対象とする神楽社中を絞った上で、②の参与観察およびインタビューを実際に行った。インタビューは、子どもと地域（大人や高齢者、地域社会）との関わりが分かるよう、事前にある程度質問項目を決めた上で臨機応変に質問を重ねる半構造化面接形式を実施した。そのインタビュー結果から、2年目以降の研究の方向性を決定した。

【研究の成果（本研究によって得られた知見、成果、論文、学会発表、外部資金への応募見込み等）】

前述したとおり、本年度は、①島根の神楽に精通した外部研究者による講義および打ち合わせ、②神楽社中および地域住民を対象とした参与観察およびインタビューを行った。

①としては、島根の神楽を対象に第一線で研究されている中村元記念館東洋思想文化研究所の中野秋鹿氏を招聘し、各神楽社中の特徴についてご講義いただいた。その後、その情報を元に、神楽社中を本プロジェクトに関連する要因に分類し、今後調査を進めていく対象の神楽社中を決定した。その結果、今年度は特に島根で最も歴史が長い（宝暦年間に始まり、その後約 300 年間途切れることなく続いている）子ども神楽である「宅野子ども神楽」に絞って調査を行うことを決定した。

②としては、宅野子ども神楽の定期公演（発表会）を見学し、ビデオ観察を行った。さらに、公演後、インタビュー調査を実施した。インタビュー結果を元にプロジェクトメンバーで議論し、神楽が子どもの発達に及ぼす影響について、以下の観点で研究を行う道筋が導き出された。1) 演者（子ども）と観客（地域の方々）が元々の知り合いであることの効果、2) 観客の多くが経験者でもあることから生じる Synchrony の効果、3) 一般的なおっこ遊びとの比較、4) 発達特性のある子の受け皿としての効果、5) お面を身に着けることによる心理学的効果。上記の観点は、1) は質問紙調査などをベースとした福祉社会学、2) 3) は NIRS・脳波などを使用した神経発達学・発達心理学、4) 5) は実験およびケース観察を中心とした臨床心理学・発達心理学、そしてすべての観点は総合的に人類進化学的な検討を進めていくことが可能である。

来年度は、今年度決まった方針を元に、メンバーが協力してデータ収集を進めていく予定である。さらに、そのデータや研究計画を元に、サントリー文化財団助成金など、地域貢献を目的とした研究を対象に助成する財団に応募する予定である。